
ツァラトゥストラの塔

清然羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツアラトウストラの塔

【Nコード】

N5677Y

【作者名】

清然羽

【あらすじ】

いきなり異世界に擬似転生させられ、世界最高の超高性能な塔の『王』を任せられることに。
突発した力を手に入れたので、楽しく暮らす予定。

異世界へ

学校からの帰り道。

自転車を漕ぎながら、容赦なく吹き付ける冷たい北風に気がつけば、もう十一月も半ばを過ぎていた。

相変わらず刺激の少ない毎日だったが、日本シリーズでは覇風にしているチームが勝ったし、月初めのテストの結果も出来過ぎだった。

それなりに満足している。

それなり、には。

ただ、やはりなにか物足りない気もした。イマイチ青春というものに憧れを抱いていないが、似たようなナニカは欲しかった。だから願ったりもした。

いや、願ったなんて具体的な行動もしていない。ただ、あんなことやこんなことを妄想したり、心のうちに夢見たりしたただけだ。ホントにたいしたことはしていない。

ただそれがいけなかったらしい。

いや、それが原因かと問われても、そこに因果関係があるかなんて今の俺にはわからんが、とりあえず罰があたったのだとしておく。

ささやかな幸せでいい。という一般論で素直に納まっていれば良かったのだ。

さすがに前置きが長すぎた。そろそろ結論をだそう。

結論。俺は異世界に転生した。

何の脈絡もなく。

ツアラトウストラの塔（前書き）

駄文ですが、暇つぶし程度にはおもしろくしたい。
見てくれた人、ありがとう。

ツアラトウストラの塔

気がついたら白い部屋にいた。

少年は、「気がついたら白い部屋にいた。」という、なんともよくわからない状況にいた。
混乱する頭で考える。

あれ、今さっきまでチャリ、こいでたよな。

肌も、冷たい風の感触を確かに覚えている。服装も、学校帰りの制服のまま、防寒目的で中にまだ着込んでいたが、それもそのままだ。

夢にしてはリアル過ぎる。

部屋は、床も壁も白一色で、学校の校庭ほどの広さ。天井は高すぎて見ることができない。

よく見ると床には碁盤格子にうつすらと線が入っている。

「こんにちは」

気がついたら、すぐ後ろに男が立っていた。

「あ、こ、こんにちは」

少年は慌てて振り返ると、男に挨拶を帰した。このような状況でいきなり後ろに立たれると少しドキツとしてしまう。

しかし、少年は、振り返って見た男の顔に、思わず首を傾げるほどの疑問符が浮かんだ。

正確な年齢はわからないが、二十代から三十代、もしかしたら四十を過ぎているかもしれない。とりあえず、年齢不詳の顔。

灰色のスーツを来ているからサラリーマンかなんかだろうか。

顔は異様に白く、短めの髪は力無く垂れ下がっており、目元も暗い。服の色と相まって地味な感じもする。

まず第一に、このような状況であっても、見知らぬ人にいきなり声をかけるような顔には見えない。

言葉を発したとしても、ちよつとすいません、だとか、あのう、だとか。

完全に人付き合いの下手なタイプだと感じた。

そして。

なぜか記憶に残らない。

醜い顔ではないが、ハンサムでもない。左右対象で、ニキビとか無精髭とかもないが……いや、それどころか、ホクロとか微妙な肌の色の違いとかもない。

おかしい。

いよいよ怪しくなってきた。

見た感じ、俺と同じ、受け身の立場に見えるが多分違う。コイツはおそらく、この部屋側の人間じゃないか。

少年の中に、確信に近い推測が浮かぶ。

「スイマセン、ここがどこかわかりますか？」

気がついたら声をだしていた。普通に考えたら、この人が知っているはずがない。しかし。

「ここは、ツアラトウストラの塔の内部、『王の間』です」

なんとも具体的な答えが返ってきた。

「てか、お前誰だよ」

「ササンといます」

「俺の名前は」

「存じております」

「なんで知ってんの？」

「ずっと見てましたから」

「ずっと見てた？ササンさんあんた」

「ササンとお呼びください」

「ササン、あんたいったい何者？」

「それについては、こちらでまとめて説明致します」

打てば響くような返答。ますます男の正体が怪しくなってきたが、とりあえずよくわからないので、着いていくことにする。

「……は？」

男が促した腕のすぐ先に、上へと続くエレベーターのような透明な乗り物が、いつの間にか出現していた。

少年は頭が痛くなるのを感じた。

いったいどこだよコト。

そのエレベータは、上へと続いていたが実は下へも続いており、どちらかといえば、少年達を乗せて下へと降りていった。

床は思ったよりも厚く、一瞬視界が真っ暗になり、そしてまた似たような白い部屋があり、また床があり。といった具合で何階も下に降りてはを繰り返し、だいぶ飽きてきた頃にようやくある一部屋で緩やかに停止した。

しかしその部屋は今まで見てきた中で一番変だった。
やたらモノが多い。

人口衛星とか、隕石とか、大きさのわからない惑星とか浮かんで、宇宙かよつ、と突っ込めばなぜかピンクの歯車が浮かんでくるくるかってに回転してた。

そして、出迎えてくれた人。体付きからして男性だろうか。というか、顔で判断できない。

いや、中性的とかそんなんじゃない。

「何で頭がテレビなんだ……」

しかも、アナログ放送時の今は見かけないあの厚い旧型。

「パグです」

「パグさん……」

「パグで結構」

「パグ、その頭はいい……」

「ああ、コレですか。僕の頭、電気器具じゃないとNGなんですよ。で、しかも音だすやつっていうと、コレか、ラジカセか、あとは電話機か……」

いやいやいや。

「なんすかNGって!」

「あ、じゃあもう、その辺含めて、話し始めちゃいますね」

王の間（前書き）

早く本編入りたい。

これはプロローグみたいなもんす。

王の間

「まあ、簡単に言うと、アナタは異世界にトリップしました、おめでとございます」

そついうとパグは手を叩き、ひとしきり満足したのか、続けた。

「と、言ってもまだ精神だけですな。肉体はこちらの世界で都合の付いたモノをあてがいますが、希望とかありますか？」

「できれば性能が高いの、あと男ならあとはなんでもいい」

「その辺はもちろん。スペックも僕がいろいろと弄るので。」

「どういうことだろう。」

少年はイマイチ理解が付かなかったが、気にしないことにした。

「僕は、見た目からみても解るように人ではありません。精霊です。この塔の現在での最高責任者になります。そちらのササンは僕の助手で、僕とは少し違ったタイプの精霊です。どうぞ、よろしく」

ガッチリと握手を交わす少年と、頭がテレビの男。

「この塔は、この世界の最先端の科学技術、といっても、魔法が主流の世界なので断トツで最先端ですが、そのすべてがすぎ込まれており、今なお成長し続けています。」

僕は、この塔を製作した方々に仕えていまして、開発メンバーの一員でもあります。ですが、生憎僕以外の関係者は人間でして。もうだいぶ前、失礼、もう九千年ほど前の話しなのでみんな御亡くなりになっちゃいました。」

その後しばらく、九千年ほど、僕一人で、この塔のメンテナンスや新機能の開発や研究などをして暮らしてたんですが、そもそもこの塔は『王』のために造られたということを先日思い出しまして、いや忘れてたわけではありません、ただ普通に皆さんの趣味で造られたようなモンなんで、すっかり当初の目的があやふやになってたんですね」

少年は気になることがあったので、素直に聞いてみた。

「魔法って？」

「お聞きになるとおもってましたよ。あなたの想像するものとだいたい一緒です。悪魔やら精霊やらを召喚したり、火や雷を起こした

り、イロイロできます。

もちろんこの塔も、科学の権化とはいえこの世界では魔法も科学の一部、いくつか応用されています」

「随分と俺の世界に詳しいんだな」

「ずっと見てましたから」

聞きようによってはかなり危ないこの発言。そのような意味はないと思うが。

「さっきも聞いたけど、ずっと見てた、ていつたい……」

「ああ、はい。精神世界を覗いていたときに、ふと妙に気になる精神がありました、元をたどったらアナタにたどり着き、『王』にたる器かしばらく観察させていただきました」

精神世界？

てか覗くってなんだよ。

「まあ、結論からいうとアナタは合格です。『王』と言っても、誰でもなれたらおもしろくないので一応条件があるんですけど、厳しいんですよね。なかなか見つかんなくて。」

ああ、精神世界ですね。いろんな空間に存在する精神は、その上位の空間、つまり精神世界に形となって存在しているわけなんですよ。我々はそれを覗いていました。

話を戻します。端的に言うと、アナタにはこの塔の王になっていただきたい。是非」

いきなり王様って。てか、具体的に何すりゃいいか言われてないし。

「ああ、ただ王になってくれればいいんで。あとは塔を探検したりだいたいの知識は『王』となった瞬間にかつてに頭に入ってくるハズですが 外の世界を観光したり、何しててもいいですよ。塔を使えば大概のことは叶います」

「うーん、俺は、なつてもいいかな。
でも、いいの？他人の俺が、王になっちゃっても？」

「全然オツケーです。てか他にいないんで」

「なら、なつてもいいかな」

「いやあ、その言葉を待っていましたよ！じゃあ、ちょっと準備が

あるので、さっきの部屋に戻りましょうか」

いつの間にかすぐ後ろに、さっきのエレベーターが移動していた。
原理がさっぱりわからない。

転生

ウッスラと目を開けると、自分が緑色をした液体の中に入っているのがわかった。体も小さくなっている。
どうやら、転生はうまくいったようだ。

肉体は世界の壁を越えることができないとかで、俺は精神だけ、まだ精神が安定していない胎児の身体に無理矢理押し込まれる形で転生することになる。

あつちの世界に置いてきた肉体が心配だが、バグ達に聞いても、彼らもどうなるかわからないらしかったので諦めた。
どうってことない。もう二度と戻らないのだから。

次に意識が覚醒したとき、急に下から強い力で引っ張られ、今まで浸かっていた緑色の培養液を伴って、少年はこの世に生まれた。
目を開けるとぼやけた視界から、真っ白の白衣を身に纏った男が、上から覗いているのが見えた。

コイツが父親か。

と言っても、育ての親であるが。

身体のほうも既に培養液の入ったカプセルの中で五歳まで成長している。

事前に聞いた説明によると、俺はちよつと特殊なシチュエーションの試験管ベビーだという。そのシチュエーションとやらが気になるが、なんでも、塔の浅い階に住み込んだ謎の科学者が、偶然試験管ベビーを造っていたので利用することにきめたらしい。

と、いうことは、ここはまだ塔の内部か。

辺りをさらに観察すると、そこら中にコードやらパソコンやらが乱雑に置かれている。部屋を見回すと、前いた部屋よりも狭いし、材質も灰色をしていて古っぽい気がする。

塔は今も成長を続けていると言っていたから、これはワリと初期の頃の部屋なのかも。わからんが、何となくそんな気がする。

少年はひとしきり観察と考察を繰り返すと、よろよろと立ち上がった。

男が歩み寄って来る。

「おはよう。調子はどうだ？」

「良好です」

培養液に浸りながら、どういう原理かはわからないが、頭に直接この世界のことが入ってきて、既にこの世界の主流な言語をほぼマスターした。

男はその後、言語を変え、さっきの質問を何度も繰り返す。覚えた言語ひとしきりが終わったところで、少年は、身体を洗われ服を着せられて、前の世界の少し大きな建物ならどこにでもついてそうな普通のエレベーターに乗せられ、すぐ上の階に連れてこられた。

そこには、自分よりも少しだけ年上の子供が全部で五人、行儀よく椅子に座っていた。

少年がきた瞬間、一斉にコチラを向く。

「君たちの新しい仲間だ。名前は……プシーだ、仲良くしてやってくれ。」

もう一人、次は女の子だが、すぐに連れて来る。その子の名前は……ミュー。二人は双子ということになるな。仲良くするように」

そう言い残すと、男は再びエレベーターで下に降り、そしてすぐに女の子を連れて戻ってきた。

女の子は、年齢はプシーと同じくらい。双子と言っていたから、この試験管ベビーのシステムはわからないが、おそらく同じ歳だろう。

ふわふわと柔らかかそうな非常に細い黒髪をしている。

そこでふと少年は、プシーとして新たに生を受けたこの体が、どんな姿をしているか気になった。

辺りをキョロキョロ見回すが、生憎鏡は見当たらない。

「よおプシー、だっけ？おまえ、ソツチのミューってやつとそっくりだよな。双子ってそんなもんなのか？」

いきなり肩に腕をまわし話し掛けてくるヤツがいた。

顔を回すと、目がチカチカするほど真っ赤な髪。そしてその下の人懐っこそうな瞳と目があう。

「俺の名前はグアーナってんだ、よろしくな兄弟」

「え、あ、うん。よろしくね」

まだ歳でいったら九か十そこいらだと思うが、随分大人びた印象につき気圧される。それに、子供っぽくするには、どうしたらいいのか分からなかった。

『王』の認定は転生後に行く予定なので、まだプシーは『王』となっていない。なんだか急に心細くなってきた。

しかし、グアーナはそんなプシーの様子に気づかずに、他の子供

たちの紹介を始めた。いつの間にか、ミューもすぐ隣に来ている。

「あの真ん中でエラそうに座ってんのがロロ、おれっちのリーダーみたいなもんだ」

一番奥に座っている銀髪の少年が、ニツコリ笑い返してくる。この中で一番年上らしいが、それでも十二歳そこいらか。とりあえず子供っぽく笑い返す。

「んで、その横のヤツがサチェナ。ロロより子供な癖に一番エラそうなヤツ」

その隣の、黒髪　やや青みがかったように見える　を肩の上辺りで切り揃えた少女が手を振ってくる。

「で、アツチの金髪のヤツはハーロ、黒いのはパル」

だいたいグアーナと同じくらいの年齢の子供二人が、なにやら二人で話している。あまり、コツチに興味がないみたいだ。

「いま、みんなでこの塔を脱出する作戦を立ててんだ」

グアーナが急に声を落として囁く。
む、なにやら面白そうな話し。

「おまえらはまだ知らないかもしれないけど、この塔の外側にはすんげえ広い水があって、その先には他の人間が住んでるらしいぜ。ロロがドクターの部屋にある本で見たって言うんだ、本当だぜ？」

俺は一度でいいから空を見てみたいんだ」

空。

そう言えばまだこの世界にきて空を見ていない。
見てみたい気がする。

「へえ、面白そうだね」

「だろ？ ミューもそう思うだろ？」

「うん」

あんまおっきい声で言っちゃダメだぞ。そう付け加えて、グアー

ナはハーロとパルのもとに走っていった。

「空か……」

さっきのあの男の人、グアーナはドクターと呼んだか、あの人は何が目的なんだろうか。

ま、そのうちわかるか。

『王』

プシーとなつてこの世に生まれ落ちてはや一ヶ月。

いや、太陽が見えないからホントかどうかかわかんないけど、寝て起きてを三十回繰り返したから一ヶ月と勝手に決め込んだ。

この塔での一日のサイクルはだいたい把握した。

まず起床後、みんな揃つて朝食を摂る。といっても、柱からチューブみたいなのが伸びていて、そこから決められた量のゼリー状のモノを吸うだけだ。あんまりおいしくないが、みんなはあんまり食事に興味がならしい。文句も言わずに食べている。

時々飽きたときには、隣に座る双子の妹(?)のミューに、こっそりあげた。

兄妹なので、間接キッスとかは気にしない。気にしません。

双子と言えば、どうやらプシーとミューは、ちゃんと血の繋がった兄妹らしかった。

他の子供たちとは、血は繋がってないが、家族のような、群れのような、そんな纏まりがある。

朝食後は、ドクターが先生役で数学やら物理やらの理系科目を勉強する。前の世界での記憶があるので、簡単だった。

この歳の子供に教えるような内容ではないが、前いた世界でもそこまで高いレベルの内容まではやらないようだ。

塔の技術からしてこの程度のレベルかと拍子抜けしたが、よく考えればドクターは外の人間らしいので、塔の外側の科学がその程度であると思われる。

そして昼休憩をとった後は、待ちに待った魔法の授業。といっても、ほぼ戦闘訓練みたいなもんだった。

魔法は、よくわかんないが、念ずることが大事らしく、普段生活する部屋とは別の部屋で火を起こしたり電気を発生させたりした。

後は格闘術も少々。この体は、なにやらそれ用に改造されているのかと疑うほど力強く、つか多分、実験としてなにかしら処置を施されてると思う。

それが終わったらドクターは自室に籠り、研究に励むため、子供たちはフリータイムとなる。

あとは寝るなり遊ぶなり自由だ。

あと、前にグアーナが話した脱出作戦だが、進んでいる様子は今のところ無い。

「こらプシー！またミューに自分のご飯を食べさせて」

「だって、マジもん。これ」

「プシー、沢山食べないと大きくなれないよ」

最近わかったことだが、サチエナとハーロはウザい。

やたら真面目過ぎて、俺とは性格が合わん。やたら年上ぶるし。

「はいはいわかったよ」

仕方なくミューの口からチューブを引き抜いて食事を再開する。

「げぷっ」

もうほとんど残ってなかった。グアーナが近づいてくる。

「おうプシー、シヨンベンいこおぜ」

「いいよ」

グアーナが一番仲がいい気がする。だいたい、ミューと二人でいるか、グアーナを入れて三人でいることが多い。

ミューは餌付けが成功したのか、いつも後ろについて来る。可愛いので悪いきはしない。ただ、流石にシヨンベンまではついて来な

かった。そこら辺は安心した。

「僕、ちょっと大きいほうもしてくよ」

「あいよ。じゃ、先戻ってるな」

トイレの様式は前の世界と一緒にだったので妙に安心したのを覚えている。ちゃんと、紙まで着いている。ただ、外の世界も一緒かどうかはわからない。そこは少し不安だ。

「リラックスしているとところ申し訳ないんですが、チョットお時間いただけないすか」

「うおっ！ビビったあ」

「それ、間違っても五歳児が言う言葉じゃないでしょ」

それを言ったら、他にもいろいろある気がするが。

「てえか、パグ！久し振り、何してたんだよ」

「いやあ、なにしろ約九千年ぶりっすから、この機能使うの。いろいろトラブルがあつて」

パグは、例のあのハイテクエレベーターに乗って、個室の中に堂々と現れた。イロイロとマナー違反な気がする。

「てかパグ、白衣似合うな」

「いや、そりやどうもです。精霊といっても科学者ですから、その言葉は嬉しいですよ」

「けど相変わらず頭はテレビか……」

「ええ、じゃないと接続出来ないんで。それよりも、本題入っていいですか？」

はて、本題とな。

「『王』の認定式の準備が整いましたんで、お迎えにありがとうございました」

ああ、納得。

「つて、え？今から？」

「はい、すぐ終わるんで」

パグに連れられて、一番最初にきたなにも無いあの白い部屋にやって来た。確かササンが王の間と呼んでいただろうか。

「どうも、王様、久し振りです。ずいぶん愛らしくなりましたね」

「おお、ササン。相変わらず暗い顔してんなあ」

ササンは前と同じグレーのスーツにグレーのズボン。死人のように白い肌には、以前と同じくニキビやホクロといったモノはまったく見られない。

髪型も相変わらずパツとしない、パツとしない精霊だ。

「んじゃ、すぐ終わるんで、そこでずっと立っててください」

後ろからパグの声がかかる。

あいよー。と返事してから、しばらくおいて、気になることを聞

いてみた。

「そういえば、今の俺の状況って？」

「ああ、ハイ。実はこの塔、イロイロあつて海のと真ん中に突き刺さってるんですが、海面から突き出てる部分は一般公開していません。

なにしろ外からしたら相当高度な技術が埋まっていますから、結構大勢来るんですよ」

「へえ、一般公開ねえ。タダで？」

この辺聞きたくなってしまう俺って……。

「もちろんタダじゃないです。外の世界からしたらおよそ千年先の技術、一階上がるごとに　塔は十年一階ペースで自己増築してるので　さらに十年先の技術のかわりに、あちらさんには命を賭けてもらってます」

「？」

「塔の至るところにはトラップが仕掛けられており、捕まったアホな方は僕の趣味のために有効活用されていたみたいです」

なるへそギブアンドテイクってことね。正直、うへー、としか。
言いようがない。

「で、彼は今までで唯一、休憩所の設けられた四階から六階にたどり着いた猛者です」

後ろで手を叩く音がする。

「九千年間でたった一人？」

「うーん、正確には違いますね。」

この九千年間で、僕のいた時代が滅んで原始時代に、その後国際社会が成立した高度な文明が滅んで原始時代に、文明が二度リセットされているので。だいたい今は、あなたの世界で言う十八世紀の末頃でしょうか」

思ったよりスケールでかいな、この塔。

「まあ、今回の文明は、前の文明が築いた技術が 主に兵器類ですが 中途半端に遺物として残っているので成長はゆっくりめで

すね。

この塔から持ち帰られた技術も戦争にお誂え向きなのばかり用意したので、さらに人類は戦争に入れ込んで、この塔との技術差はさらに広がりますよ。

具体的にいうと、魔法を戦争の主流に持ってこようという動きがあるようですが」

「そお！その魔法、もっと詳しく教えてくれよ」

何となくで使えたが、他のみんなも使えるしあまり派手なことも出来ない。せいぜい念じてる間火がついたり、電気がバチッてしたりする程度。

ここでまわりと一気に差をつけたい！

「すぐにわかりますよ。

認定が完了します」

「え」

バチッ。

頭の中で閃光がひらめくと、次の瞬間、膨大ななにかが体中を駆け巡る。

この塔の内部構造。動かしかた。成長。塔の脈打つ鼓動。
科学の知識。最新の研究の成果。

「お……おお……おお……」

塔の記憶。塔に及ぶ重力の影響。

そして魔法。

魔法、それはイメージを形にする方法。文明が起こるたびに必ず
栄え、富と破滅をもたらす。文明と必ず共存するそれは、人類の
深層心理が起こす宗教の起源とも言える。

「我々は、魔法を科学的に解明しようと思いました。」

いままで、あまりにも宗教と結び付きが強かったそれらは、その
時まで、科学的に解明されるのを拒み続けていた。

しかし、科学の進歩に魔法の解明は必要不可欠。その動きは、急
速に世界に広がる。次々に論理的説明がされていく魔法は、ついに

過去と決別、もはや宗教とは掛け離れたこの世に確かに存在しうる現象としての位置づけを築いた。

「魔術の進歩は、科学の進歩をさらに加速させ、ますます豊かになっていく社会のなか、やがて人間は」

戦争。

人類はまず、魔法の解明のために、魔法を技術として発展させた。最初は手探りでも、そこから集まったデータに基づき論理的研究がなされるようになり、ついに魔法学としての一つの学問が大成した。

魔法は、この世の他の現象を再現することができ、その範囲に制限はない。人の脳内で描かれた強く且つ現実的で繊細なイメージを察知し、それを元に現象を再現する。

科学的には難しかったかもしれない、激しい感情の及ぼす魔法への影響も発見された。精神の状態が魔法と密接に関わる。

再び宗教に吸収されかねないこの現象は、しばらく隠されてきたが。

我々によって暴かれる。

我々はこの不可思議な現象を従来の科学に無理矢理押し込めた。

かつてから粒子の観点で事象を説明する立場があつたが、我々はこの魔法を魔力によるものとし、その魔力を媒介するとみなす魔力子という仮説的粒子の存在を予想した。

なんらかの影響で空間に生じた強い歪みが生み出す物理的効果すなわち魔力、その生み出された魔力の型によつてありとあらゆる現象が再現される、と我々はかんがえる。

魔力子の含有率が高い空間では、おそらくより強い歪みが生じる。そして、空間に強い歪みを生じさせるそれこそ精神ではないだろうか。

この理論ははまだ未完成であるが、既に空間の歪みが人体に生じる原因不明の変化といった形で確認されている。

魔法の、そして世界の真実が解き明かされる日は近い。

状況がかわつた。

世界は、いや人類はおそらく、滅亡する運命にある。

どちらにせよ、我々が科学的進歩の極みに達することない。人間よ、与えられた科学の恩恵につい邪念が入り込んだのか。

神が我らを哀れみ下さつたのか、非常に科学的な精霊と私は友人になることができた。神といえ、そういえば、私がこの道に入っ

たのは世界の始まりが知りたいからだった。

世界はどうしてできたのか。神が造られたのか。違うなら、いつたい誰が、どんな目的で作ったのだろう。知りたい。おそらく私は最期の時までその答えが知りたいだろう。

仲間達と塔を建てた。我々のいままでの研究成果、いや、僕たちの趣味がすべて詰まっている。しかし出来るなら、知りたかった。宇宙の外に立って、宇宙を見てみたかった。

僕が見上げるこの空を、イチバン上から見下ろしたかった。

超古代魔力機関『ツバサ』

よく分からないうちに終わっていた『王』の認定式。あの時、沢山の知識が頭の中に入ってきてビビった。魔法について深く知ることができたが、この塔を代表するかつての文明でもそれは推測の域に過ぎないこともわかった。

より強いイメージがより強い歪みを生む。それは魔法の規模にも効果を及ぼすが、魔力は同時に歪みに応じた相応の負担を人体に要求する。

己の身に合わない望みはその身を滅ぼす。

残念なことと言えば、塔の外の現在の世界について何の情報も得られなかったことだ。これはやはり自分の目で確かめるしかない。楽しみが一つ増えた、とでもしておく。

そういえば、塔の脱出計画だが、いまだグアーナがしきりに自分の外の世界への思いとともに語ってくるだけで、進んでは思えない。

今はもう、俺が誕生して五年が経っている。俺ももう十歳だし、最年長のロロ兄はもう十七だ。相変わらずやっていることは一緒だが、ドクターの目的が気にならなくもない。塔の力を駆使して探ればわかるかもしれないが、ここは一応慎重に行く。

出来れば早く外に出たい。

俺ことブシーとミューのあとに、一人子供が生まれたが、しばらくして死んでしまった。試験管ベビー特有の病気や副作用かナニカ

だろうか。ドクターはただ無表情でその亡きがらを抱き上げると、どこかに持ち去った。

みんなボカンとしてた。いままで元気にはしゃぎ回ってた弟分が、急に動かなくなったのだ。わけが分からないといった顔をしていた。あれが死だよ、と教えてあげたかったが、俺の役はこの集団の最年少の可愛い弟分に過ぎない。だからそんなマネをするわけにはいかなかった。

いや、みんな死については知っている。ちゃんと授業でも習った。戦闘訓練でも。

ただ、身近に死を感じたことがなかったただけの話だ。

「プシー、俺はぜってえ外に出るぞつ。こんな狭い部屋んなかで死ぬなんて絶対にムリ！」

「そうだね。僕もそう思うよ」

「だろ？なんで口口のやつはなんもしないんだよ。あいつは外に行きたくないのかな？」

「うーん、どだろ」

「おにいちゃん、ちょっと来てえ」

ミューは俺のことをそう呼ぶ。
グアーナの有り難い演説を切り上げて妹のもとに走る。

「どこ行くんだ？」

「ピピをさがしに行くの」

「ピピはもういないんだよ」

「どうして？どこにいったの？」

「……わかんない」

「わかんないのになんでみんなさがさないの？」

「うつん、ピピはもう死んだんだ。だから捜しても意味ないよ」

「どうして？シンドラみんなどこに行くの？」

「わかんない。たぶん……空のうえ、かな」

「おまえはここでの生活をどう思ってるんだ？」

「退屈だし窮屈。早く外に出たいよ！」

俺、ミュー、グアーナの三人で、ロロ兄に脱出計画のことを聞きに行ったら、こんなことを聞かれた。

「おまえらは？プシー、どうなんだ？」

ロロ兄が優しく聞いてくる。きっとこの人も外に出たいんだろうけど、みんなのリーダーとしての立場からなかなか行動にできない。

「僕も、そう思う。ここは狭いし、退屈」

「ミュー」

「……わかんない」

「そうか」

ロロ兄はそう言うと、さっきまで読んでいた分厚い本に目を落とした。

「安心しろ、計画は万事順調である。ただおまえらはまだまだガキだ、外の世界で生きていくにはもっと大人にならなくちゃいけない。それまでの辛抱だ」

グアーナはまだまだ不満そうだったけど、ロロ兄の自信満々といった顔に安心したのか、納得して去っていった。
俺とミューはまだその場にいた。

「なに読んでるの？」

気になって尋ねた。

「おまえには難しいよ」

いつもこうだ。なにか話し憎かったり、めんどくさかったりすると、すぐ俺らが子供なのをいいことにテキストに受け流す。

ふん、俺がどんだけ大人かもしれないで。

「どこから持ってきたの？」

「うん？おまえらも欲しいのか？」

ドクターの部屋だ、エレベーターで一個した。それ以上は絶対降りたらダメだぞ？」

「……ドクターはなんで僕達を閉じ込めるの？」

一瞬、ページをめくっていた指が止まる。

「ねえ、どうして」

「それは……まだ分かん。でもたぶん良いことじゃない。
……このことは他のみんなに言っなよ」

「ぜってえ口口兄さんはなにか隠してるっ」

「……」

「他のみんなもなんでなんも言わないんだよつ。外に出たくないの

か、あいつら？」

納得したと思ったら、全然してなかったグアーナが、絶賛愚痴り中。

変に同意してたせいで、なんか同じグループみたいなことになってるし。はっきり言って、いまの段階じゃまだ無理だと思うよ、時期尚早ってヤツ。第一、俺とミューはまだ十歳だ。

「聞いてくれよプシー、こないだハーロのヤツ、何て言ったと思う？
『なんでそんなに外に行きたいんだ』だよ。
んなモン、ココがつまんねえからに決まってるだろうっ」

「ねえ、グアーナはドクターのことどう思ってる？」

「あ？急に何だよ」

「どう思ってる」

「ううん、そだなあ、よくわかんないな。父親ってのがよくわかんないけど、そんな感じなんじゃないのか？
どうしてだ？」

「……別に」

「あつ、ズリイぞおめえ、教えろっ」

はん、ガキめ。

「とにかくっ、俺は早く外に出たいのっ。

知ってるか？空はな、すんげえでえんだぜ。写真に載ってるのなんてほんの一部、ホントは入り切らないほどおっきいの！」

「うん、こないだドクターが言ってたね」

「空ってのはなんでできてんだろなあ」

「？……空の向こうには宇宙があるんでしょ？」

「かあっ！おまえまでハーロみたいなこと言い出しやがって！
うつつたのか？ハーロ菌がうつつたのかコノヤロー」

さすがにウザかったのでげんこつしといた。グアーナは若干涙目になりながら先を続ける。

「空の先に宇宙があるなんて誰でも知ってる。ハーロはただドクタ

「が言っただけをそのまま繰り返してるだけだ。」

じゃあおまえは、空がなにでできてんのか説明できるのか？宇宙はなにでできてんだよ？無ってなんだ？

知ってるようでなんも知らねえんだよ俺っちは。こんな塔のなかに引きこもってんだからなっ」

そう早口で並び立てると、どうだ、とでも言わんかのような興奮した目で、挑むように見つめて来る。

「なに、じゃグアーナは学者さんにでもなるつもり？」

「はあ？学者つてのはドクターみたいなモンだろ？」

俺は年がら年中引きこもって頭でっかくして考えんじゃなくて、実際に行つて、この目でちゃんと世界を見たいの！」

「うわっ、唾っ、汚っ」

「ああ、ワリイ興奮しすぎた」

はあ、と一際大きいため息がこぼれる。そりや俺だつて外に出たいさ。でも、俺達みたいに、ただちよつと魔法が上手くできて、他の子供よりもちよつとばかり勉強が出来るだけのただのガキが、生きていけるほど世界も甘くはないと、そう思うわけですよ。

だからあんまりね、なにしろ俺まだ十歳ですから、危ない橋は渡りたくないわけですよ。

てか君も同じだよグアーナ？

「そりゃ僕もこの目で世界を見てみたいよ。でもそんな焦る必要ないと思う」

「なに言ってるんだよっ、おまえ、ピピのこと忘れたのか？」

「え？」

「ベンキヨしただろ、子供のできかた。

けどおれっちは、あきらか違うやり方で造られた。道理にあつてねえんだ、世界に嫌われてんだよ。いつ死ぬかわかんねえんだぞ？明日かもしれないだぞ。なのに、そんなに悠長に構えてられるかっ」

「うえっ、唾っ、きしょっ」

「あ、ワリイ」

またまたため息がこぼれる。我ながら十歳児のとする行動じゃないなコレ。

けど、そうかあ。いつ死ぬかわかんないのか、俺。って、それってケッコーヤバくねっ？え、俺一応『王』だから、塔の自動治療効果でなんとかなるかな？なるよねっ？

「……不安になってきた」

「だろっ？」

あれからさらに五年が経った。新しい子供が連れて来られることは、ピピ以来なかった。俺達はその後誰ひとり欠けずに、気づけば俺ももう十五になっていた。

相変わらず毎日同じことを繰り返してる。戦闘に関してだけ言えば、確実に前よりは強くなった。ドクターの目的は相変わらず分からない。

と、思っていたら。ある日、突然ドクター自身から告げられた。

「君達には、他の人類が足元にも及ばないほどの魔法に対する適性がある。これは、その君達の才能をさらに引き出す魔力機関を搭載した、言わば魔法兵器だ」

そう言ってドクターから手渡されたのは、四角い白い箱だ。どことなく、あの王の間の白い材質に似ている気がする。

どこを捜してもボタンは見つからないし、いったいこれはなんだろう。

「それは、君達の声にのみ反応する。ゆえに交換しても他人のものを使うことはできない。」

既に下界にも広まっている現在最もポピュラーな兵器だが、古代の失われた技術がそのまま組み込まれている最も有効的な戦闘手段だ。

君達の人の域を超越した身体能力、魔法適性はその兵器に更なる可能性を見出した。我々は研究データをもとに、最も君達にあつたオリジナルタイプを開発した。名を『ツバサ』という。音声パスワードもそれで統一してある。今日からは、一日のすべての時間をそれを使いこなすための訓練に費やさない。それが終われば、より実践的な戦闘訓練だ」

つまり俺達は、戦争のための高性能殺人マシンだった、てわけね。

「フムフム、これはなかなか面白いですね」

俺は久しぶりに、訓練の休憩を利用して王の間に来ていた。

「なんかわかった？」

パグの手から『ツバサ』を受け取りボンヤリと眺める。

「ええ、これは私たちの時代にも広く使われていた原動機です。ホントにそのまま組み込まれてますよ。ま、今の人にこれの原理を理解しろと言われてもムリでしょうね」

「ふーん、これがねえ」

「しかし、これは酷いですねえ。こんなに出力がデカイのを人に直接動かさせようなんて、すぐに体が分解しちゃいますよ。平気でしたか？」

「別に何とも。ちよつくら改造されてるみたいこのカラダ。おまえの時代にはこういうのなかったの？」

「まあ僕の時代は良識ある人達でしたからね、そんな非人道的なマネはいくら科学の進歩のためでもやりませんでしたよ」

「そうかあ、非人道的かあ。確かにそうだな。勝手に命作つて、その命にも意思はあるのに機械みたいに扱いやがって。」

「ああ、チクシヨウ、なんかスゲー腹立ってきた。」

「ま、体になにか悪いことがあれば、すぐに塔が反応してあなたに教えてくれると思いますから、安心してください」

「ありがとパグ。そういえばササンは？」

「いまちよつと下界にオツカイにいつてもらってます。なにしろこの頭で町出歩けませんからね、今の時代は精霊との繋がりが希薄になつてるんです」

変だつて自覚はあつたのか。

「そういえば、声にノイズが混じつてるような。風邪か？」

「いえ、スピーカーの調子が……もう買い換えですかね」

スピーカーの調子つて。てかこの時代に音質が良いスピーカーなんてあるのか？

少しぬけたところのあるこの精霊が心配だが、一旦上に戻ることにした。因みにこの王の間は、海面上の部屋を一階とするなら地下一二階だが、塔の内部構造についてはまたおいおい。

「ササンによろしく言つて」

「はい、伝えます」

このツバサは、その名のとおり空を飛ぶことができるアルミゲン（魔力子を反射しやすい金属）でできた翼である。形はみんな様々だが、共通した機能がある。

まず、音声パスワードによりロックが解除され、四角い箱が展開しツバサへと変形する。箱自体は手の平にのつけられるほどのコンパクトサイズだが、展開後の『ツバサモード』は体に見合った翼の大きさになるのでちょっとカッコイイ。

そして、魔法により推進力を得て高速で前に進む、または空中に上昇する。

基本的にツバサの中心部、背中の真ん中に推進力が発生するように魔力機関が配置されているが、なかには展開して独立した幾つもの翼それぞれに組み込まれているものもあり、その特性が極端なミューのツバサは、翼がそれぞれ細かく振動しホバリングすることができる。

正直、空中で立ってるみたいで羨ましかった。

また俺達の『ツバサ』には、それまでの『ツバサ』にない重力子の反粒子を再現するイメージ（古代の技術で人のイメージが記録さ

れた極小のチップ。パグが言うにはこの時代ではそもそも重力が発見されてないため、単にものを浮かす魔道具だとおもわれているようだ。なぜかドクターは重力の存在を知っているようだけど）が組み込まれており、g（加速度。人体が耐えられる加速度の限度は5〜6g）をほぼ打ち消すため、驚異的な加速を可能にしている。

ただ、やり過ぎは大規模な空間の歪みを引き起こすので、ムリをすると魔力で体が壊れる。

注意。

そして、各々のツバサには魔法の発動を助けるイメージが一つだけ組み込まれている。もちろん、この塔の戦利品だ。

俺のツバサは、俺の体が『王』であり他のみんな以上に魔力の耐性が高いということも含めて、パグにさらに改良してもらった。コラ、ズルとか言わない、そこ。

俺のツバサは他とかなり形状がことなり、正直翼と呼ぶのは厳しい。

三日月型の翼（ルナウィングと名付けた）を体に巻くように背後に配置し、さらにその後ろに中をくり抜いたような円い輪形の翼（命名アポロウィング）が置かれる。これが基本スタンス。

アポロウィングの位置を調整し正面から見ると、後光が差し込んでるように見えなくてもない。白いのでさらに神々しさアップ。

両翼は独立しており、別々に動かすことが可能。

ルナウィングは砲弾などの軌道を三日月の形に沿って反らすことができる、アポロウィングはシールドを展開できる。両翼ともに魔力機関が組み込まれている。

使いこなすのはかなりムズイが、その分多彩なアクションが取れるのでこりゃ楽しい。

早くこのツバサで大空を飛び回りたいなあ。因みに俺のツバサに組み込まれたイメージ、まあ属性みたいなモンは、ドクター曰く「衝撃」。相手の人体内部にダメージを与える、みたいな。

けど塔の知識を用いて解析した結果、正確にはあらゆる波を再現するイメージであることが判明した。なにげに強いかも。あとは、オベンキョしだいか。塔の中探して、もう一コぐらいいいの付けちゃおっかな。

塔を出た子供たち（前書き）

プライベートの話ですが、作者には修学旅行という青春一大イベントがもうすぐそこまで近づいております。

てか明後日からですね。

行き先は海外ですが、果して無事帰って来れるかどうか。もしこれ以上この小説が更新されないときは……

いや、縁起でもないんでやめときましょう

塔を出た子供たち

もうすぐ一年が過ぎる。『ツバサ』の訓練がスタートしてからみんな死にもの狂いで練習した。

思いのほか楽しかったこともあると思うけど、なによりもやつぱ。

「脱出作戦を近々決行するぞ」

というロロ兄の言葉が大きい。作戦には『ツバサ』がどうしても必要らしい。

多分、『ツバサ』で下の階のトラップをくぐり抜ける気だろう。

ドクター曰く、塔の外のツバサの乗り手の百倍近くの技能を俺達は持っているらしいから、たぶん楽勝だろう。

ただ問題は、どうしてそのことをロロ兄が知っているかだ。他の兄弟たちはもちろん、この俺達が活動する三階層しか知らないわけだから、どこに出口があるかも分からない。しかもエレベーターで上にいくのも下にいくのもロロ兄に止められてた。けどそれって、ロロ兄は他の階のことを知っているってことだろ？

やつぱりロロ兄は脱出作戦のために、念入りに下準備をしてたんだ。塔の構造やトラップのこと、出口の場所とか。

やつた、もうすぐ外に出られる！ そう思うと余計に訓練に力が入る。王となった俺の肉体は、いろいろと補正がかかっておりもちろんツバサもみんなの中で一番うまく乗りこなせた。ただ、あまり

目立ちすぎると良くないと考え、今は若干落ち着いて訓練している。そうになると、今一番操作に長けているのは意外にもハーロだった。他のみんなも自由に宙を飛び回っているけど、わずかにハーロが優っていると思う。

しばらくして戦闘訓練が始まり、ツバサを起動した状態での模擬空中格闘戦や空からの地上への攻撃などから、戦争を意識しているとは思えない五人での大規模な連携奇襲作戦の練習なども行われた。

みんな、自分達が戦争のために造られたという到底信じたくない事実にならず動揺しているようだったが、自分達の自由のためにその感情を押し殺して端からみれば真面目に訓練していた。ただし、その訓練の成果は最終的にすべてこの塔から逃げるために使われる。俺達は戦争に狩り出される気などサラサラない。

夜中。

唯一の明かりである照明は既に消灯され、俺達の『家』であるこの塔は闇に覆われている。そこに俺達七人以外の生き物の気配はなく、アタリを完全な静寂が支配している。

そして。

真夜中零時を告げる塔の内臓時計が、ポーンと低く何度も泣き声を上げはじめた。

「時間だ、行くぞ」

囁くような、けどしっかりと耳に届いた口口の声。
合図だ。

俺は一度、心の中で自分に激をいれると、解除キーを唱えた。

「ツバサ」

と、同時に聞こえるみんなの声。
突如として暗闇に淡い緑色の光が現れ、その光に照らされた七人の姿が闇に浮かんた。その背には低く唸る白色の『翼』。

エレベーターに乗り込み、一階まで下降する。ここからはもう戻れない。一階から三階の間は、エレベーターは下へしか人を運ばない。

狭い個室で全員の緊張をピリピリと感じる。でもなんだかワクワクする。もう後には戻れない、そんな不安定な状況が、力を手に入れた今はすごく楽しい。

扉が開く。一步踏み出す。そして、塔が動きはじめる。

辺りを覆う暗闇の奥から不気味な機械音が唸りを上げ、ポツポツと小さな光りが灯りはじめ、死のトラップの銀色のボディが微かな明かりに浮かんた。

しかし、その明かりのもとに、意外な姿があった。
全員に硬直が走る。

その姿が言葉を紡ぐ。もう何年も聞き慣れた声。

「こんな夜中に、全員揃って、何処に、行くつもりだ？」

てんで見当がつかない、というような場違いな抜けた声。その問いに言葉を返そうか返さまいか、悩む前に口口が怒鳴った。

「この塔を出る！」

その声を合図に、皆が一斉に宙に跳んだ。グアーナがドクターの体目掛けて突進していく。ドクターは少し後ろに後ずさると、目をつむり片手を前に突き出した。

その手から、グアーナに向けて電撃が放たれる。

「グアーナ！」

「っ……大丈夫だっ、先行け！」

グアーナは咄嗟に翼を前に展開し電撃を防いでいた。安堵の溜息

がこぼれる。

ダメだ、油断しちゃいけない。

気が緩みかけた自分にまた喝をいれ、先に進んだ五人の後を追ひ、死のトラップがうごめく暗闇に突っ込む。

「行かせん」

ドクターが再び片手を突き出し、俺達に向け電撃を放つて来る。到底常人には思えないほどのでかい稲妻。

「っ、アイツ、人間かよ」

誰かの切羽詰まった声、たぶんバルかな。その声が聞こえたすぐ後、稲妻を避けながらグアーナが追いついて来た。

「ちつきしょ、ちつと喰らっちゃった」

「大丈夫？」

グアーナが強がるように笑う。少し辛そうだ。

「このまま突っ切るぞ！ドクターばかりに氣を取られるな、トラッ

「プにも注意しろっ」

ロロが叫ぶ。

闇の奥から飛んで来る幾つもの雷。俺達七人と比べても遜色ない力だ。きっと、この塔で拾った雷のイメージでも使ってるんだろ。でもなにかを持っているような様子はない。何処だ？このままじやみんな捕まる……。

「パル、大丈夫！？」

「大丈夫だっ」

サチュナの声が聞こえて振り返ると、少しずつパルが遅れはじめていた。雷の包囲網がすぐ後ろまで迫っている。

どうしよう……パルが捕まる！

「待てプシーっ、俺が行く」

「グアーナ！」

「大丈夫だ、先行つてろ」

グアーナがパルを援護するため、方向をかえて加速していった。俺も行こうと思ったが、後ろを振り向いたグアーナに制される。

一瞬悩んだ後、やはり助けに行こうと方向転換しようとしたとき。

「兄貴、横！」

「っ！」

横から刃が行く手を阻み振り子のように迫って来るが、ミューの声で咄嗟に気づき間一髪かわす。

「つぶね」

「集中しろばか兄！」

「ワリ、助かった、サンキュ」

見ると、グアーナがパルのもとにたどり着き背中を押しながらこっちに向かってきていた。

止まっていたスピードを上げ、逃げることに集中する。塔の発するわずかな光りを頼りに、罨を避けひたすら前に進んだ。

「もうすぐ出口だ！みんな、頑張れ！」

後少し。

後少しで出れる。久しぶりに太陽が見れる。世界を見れる！

「させん！」

すぐ近くで聞こえた声。

「んな馬鹿なっ、どうなってんだよ！」

逃げられない。そう悟ったのか、グアーナがドクターに突撃する。その後、ハーロとサチュナが続く。ドクターは相変わらず無表情で、左手を前に突き出した。指の先に電気が集まる。

左手？

確か、ドクターは右利きのはず。

「！」

咄嗟に『王』の力で塔を動かし、起爆式のトラップを起動させた。空間に突如出現した光の刃がドクターの左腕を肘から撥ねる。ドクターの目が驚愕に見開く。

が、次の瞬間、三人が発動した魔力がドクターの体でぶつかり合いさらに強い空間の捻れを発生させ、ドクターの体を巻き込んで一瞬強い光となってこの世から消え去った。

グアーナが右手で拳をつくり宙に掲げる。

「じゃあつ、見やがったかこのヤロウ！これが俺の実力だ！」

「ふん、今のは僕がやったことだろう。勝手なことを言うな」

「こらこらハーロ今は喧嘩しないでよ、グアーナもまだ終わりじゃないんだから騒がない！」

ハーロにつかみ掛かりそうになったグアーナを取り押さえ、最近はずっかりお姉さんの貫禄のついたサチュナが二人を諷める。

けど、これであとはトラップをかい潜って出口にたどり着くだけ。みんなの一番後ろに着き、始めからこうすれば良かったと、向かって来るトラップを塔を制御してそれとなく反らしていると、不意に肩を捕まれた。

振り返ると、かなり辛そうな顔のグアーナがあった。眉間にはシ

ワがより、顔にかなりの汗が吹き出て、なんだか気持ち老けた気がする。

「グアーナ？」

「おうプシー、俺らの夢、覚えているか？」

「夢？」

はて。

こんな時に、マジメに思い当たらないんだが。

「外に、出て、空を、見るって夢だ」

ああ、あれね。

なんか勝手に俺の夢にもなってるし。てか、グアーナの様子がなんかヤバい。

「あの夢、みんなの中で、お前だけがマジメに聞いてくれて、俺はすごい嬉しかった」

「え、急にどしたの？あのグアーナがそんなこと言うなんて」

なんか、恥ずかしいんですけど。

「バカヤロ、どいう意味だそれは」

グアーナが疲れた顔で、ヘラヘラ気の抜けた笑い声をあげる。

罨は密かに俺が反らしているんだが、しかしちと君は油断しすぎでないか？ホント緊張感足りねえなあコイツ。

まったくしょうがない。こんなんで生きていけんのかかなり心配
っすよアニキ。

ふと、グアーナが笑うのをやめた。

となりをみると、らしくない穏やかな笑みを浮かべている。やっぱりちよつと老けてる、そう思ったとき。

「ワリイ、俺はここまでみたいだ」

「え？」

急に失速したグアーナはそのまま、力無く深い闇の底に墮ちて
いった。

悪夢みたいだ。

グアーナが死んだ。死因はたぶん、歪みの影響を受けすぎたこと。慌てて皆を呼び止め、後を追って床に降り立ったときはもう既に息はなく、ツバサも魔力を失い機能停止、床に崩れ堕ちていた。

誰よりも外を望み、でも結局叶わなかった。みんなでグアーナの死を悲しみ、本にのつてたこの世界の方法で簡単に弔ってから、そのまま出口に向けて再び飛び立った。

もうすぐ十六になるミューもさすがに死を理解していて、俺達は特別仲が良かっただけに相当ショックを受けたようだった。暗闇でとなりを飛ぶミューの手を弱く握ると不安そうにギュッと握り返された。

しばらくして出口が見えてきた。

それはまるで、昔話にでてくるお城の扉みたいに大きくて、華麗な模様が刻まれていて、淡く発光して優雅にそびえ立つ様はホントに夢のようだ。

「ドクターの資料に寄ると、一日に一度、外の時間で午前二時から三時の間だけ開かれる」

そう言つと口口は、いつかドクターの部屋からとってきた懐中時計を開いた。

この塔は、一日のうちその時間帯だけ開かれる。だから、それま

でこの心細い暗闇の中で待たなくちゃ行けない。

『王』の力で開いても良いけど、なにか違う気がする。

「時間だ、開くぞ」

ゴーン。

と、時間を告げる鐘の音が響き渡る。
扉が開いた。

隙間から徐々に広がる星降る夜空。
ふと、頬を冷たいものが伝う。

そうか、これが。

「これが空だよ、グアーナ」

アカデミー

人間がいる限り、世界から戦争はなくならないだろう。戦争というものがあるかぎり、世界に兵士はいなくならないだろう。兵士というものがあるかぎり、この世界から兵器はなくならないだろう。

ならば、世界から争いをなくすことよりも、むしろそれを積極的に肯定し、自分の身のため肉親のためひいては国のために、才あるものは武器をとり兵法を学び争いに出向くことこそ世の道理、才ある者の責任ではないだろうか。

我がアリシユニールアカデミーでは、才ある諸君の入学を心から待っている。諸君らが将来、この国の『ツバサ』となってくれるよう、職員一同熱意と誠意を以って諸君らと正面から向き合える日を心待ちにしている。

我が校の教育方針は、

常に精進

先手必勝

暴力崇拜

である。

諸君らの健闘を祈る！

『アリシユニールアカデミー学校紹介パンフレット』アリ
シユニールアカデミー学校長挨拶より

ここなら俺を愉しませてくれるだろうか。

蔵かにそびえ立つ門を抜け、だだっ広いガーデンの先に建つまる
で都の貴族の宮殿かと思わずツツコミたくなるほどに華やかな校舎
を睨みつけたが、バラナは一人今までの生活に思いを馳せた。

ガキの頃からそうだった。何をやっても一番、勉強も運動も仕事
も。ただ、自分の中で一番誇りだったことは、誰よりも強いことだ
った。

生まれてから今日に到るまで、ただの一度も喧嘩に負けたことが
ない。どんなにデカがろうが、どんだけ年上だろうが、すべて一撃
のもとにノシてきた。とても幸福だった。満足だった。

だが、幸福はそう長くは続かない。いつの間にか、バラナは失望
していた。この町に、この町の人間に。もうあらかたの町の荒くれ
どもは自分の手下、たまに刃向かってくるやつも片手でやっても才
ツリがくる。

もう、この町に、俺を満足させてくれるやつはいない。

その思いが確信へと変わった時、バラナは町を出た。着いた先は
この学園。ここでテッペンをとる。ここならば俺を満足させてくれ
るかも知れない。

バラナは不敵な笑みを浮かべる。

せいぜい俺を失望させないでくれよ。

既にその目は、常人のモノではない、狂気がぎらついていた。

まずはアイツラダ。

その視線の先に、どこかの貴族のボンボンだろうか、いつちよ前に軍服を着て黒い艶やかな髪を整え、引き締まった美顔にウッスラと笑みをたたえた青年がいた。

初戦の相手としては物足りないが、まあ夢見がちなガキに現実を思い知らせてやるか。

ふらりと近寄り、あからさまに肩をぶつける。思ったよりしつかりした肩に、少しコチラがよろけそうになるが、踏ん張って青年を睨みつけた。青年は慌てたように振り返り、頭を下げようとするがその前にまくし立てる。

こういうのは、先手が大事なんだよ。相手が思いも寄らないやり方で、ビビらせた方が勝ちだ！

「痛つてえなあ、どけみて歩い……え？」

思わずマヌケな声まで出てしまった。
というか、いつの間にか肩が外れていたら誰だってそうなる。

と、急に青年の雰囲気が変わった気がした。

慌ててバラナは青年に視線を戻すが、視界に入ってきたのは握られた拳。

相手の思いも寄らないやり方でビビらせた方が勝ちだ。

何もいわず。肩をぶつけられたのはそっちなのに文句の一つも言わず。

その青年は殴り掛かってきた。しかも顔面グーパン。

バラナは完全にビビらされた。学園はこんなバカみてえな奴らばかりなのか。その日以来、学園で彼の姿を見たものはいない。バラナは町に帰り、実家のパン屋を継ぎ真面目に暮らしたらしい。別の形で国に貢献することに決めたようだ。

わざわざ兵士にならなくとも、そう、わざわざ戦争に参加しなくとも、お国のためにやれることは沢山ある！あんなところは……あんな兵士育成アカデミーなんて、ホントに殴り合いが好きな奴らが行けばいいんだ。

アカデミーはホントにおっかねえところだ。

プシーとミューは、塔を出たあとそのまま西へと向かい、ルナスワート大陸の東の端っちょにあるグリテン島にたどり着いていた。国土のほとんどが緑豊かな自然に囲まれており、そのとてもものどかな景色が気に入ったのでしばらくここいらを探索しようと二人仲良く翼をたたんで歩いていたところ、ずいぶん高い壁に囲まれた古い城が見えてきた。

写真で見たまんまのそのロマンチックなお城にミューは大興奮。プシー自信も気になったので調べて見ることにした。

ちなみに他のみんなとは塔をでたところで別れた。各自塔を無事脱出したら自由に生きる。このことは塔を出る前から決まっていたが、いざその時になるとちよつとばかりジーンときた。

まあ彼等の『ツバサ』なら世界を一日で一周出来るので、これが今生の別れというわけでも無いが。

近づいてみると、何やら門の前に人だかりができている。ミューの体がピクリと反応した。

ああ、他の人間を見るのはこれがはじめてだもんな。

不自然じゃないように自分もなにかしらアクションを起こしたほうがいいと、ミューにわかるようあからさまにピクリと反応してみたプシーだが、馬鹿にされてると受け取ったミューからツバサの

推進力を活かした強烈な鉄拳制裁を喰らった。

「ぐぼあっ……なにすんの」

「うーっ、ちよっと人が多くてびっくりしただけじゃん！なんでバカにするの！」

やれやれ。

怒り心頭なミューを何とか宥めながらプシーは門の前までやってきた。

人だかりは門の横の塀に貼られた紙を熱心に覗き込んでいるようだった。

「これって、ウワサの合格発表てやつ？」

いつウワサになったかは知らないが、ある日ロロがドクターの部屋から持ってきた薄っぺらな紙に、学校に入るには試験があることそしてその合格発表の様子がかかれていた。それは、一時期塔の中でしきりに話題に上がり、おそらくミューはそのことを言っているのか。

「ちがうな」

「え、として？」

「あの紙には試験問題が書かれている、試験はこれからみたいだな」

塔の男衆は皆概して背が高く、プシーもその例に漏れず周りより頭一つ分も高いその背で悠々と紙の内容を読んでいた。

いや、それでもおかしい。とミューが首を捻る。

「え？この距離で読めたの？」

「細かいことは気にすんな、お兄ちゃんパワーだ」

もちろん、塔の技術で視力をあげるという裏技『王』の力である。

試験内容はプシーからしてみれば単純な計算問題、ミューからしてもまあまあなレベルの問題だった。具体的に言うとな分数の掛け算。その下に、「この問い解けぬ者はこの門抜ける可からず」と書かれていた。試験官もいないので実質素通り可能であるが、おそらくなにがあっても自己責任ということをアピールしたいのだろう。

それを理解してか、門をくぐる者は極わずかである。

こんな簡単な問題解けないやつなんているのだろうか、と疑問に思うプシーであるが、これが外のレベルかと納得する。

「どうする？」

念のためミューに訊く。

「行こつ、兄貴！」

どんな学校かもわからないのに入学するなんてまったく考えられない話であるが、塔の力を使えばなるようになるもんだし、他に行く宛てもない。

なら別にここで遊んでいてもいいか、とプシーは二つ返事で門をくぐっていった。

プシーたちが門をくぐるとしばらくして門がひとりでにしまった。ガタン、とものものしい音を立ててしまった門に気圧される他の受験生たちだが、プシーとミューは別だん気にするでもなく陽気に周りに見える庭の景色を眺めあーだこーだ話していた。

その二人の姿を見てまた気圧される受験生たち。全くそっくりではないが片方はもう片方をそのまま男にしたような、もう片方ももう片方をそのまま女にしたような。双子だろうと容易に想像できたが、ここまで雰囲気似た違う人間は見たことがない。

しかもそのどちらもがまったくお目にかかれなほどの絶世の美男美女であるのだから、なおさら周りの注目を集めた。ふわふわと柔らかな細い黒髪を風邪に遊ばせながら、周りの景色に仲良くはしゃぎ合うさまはまるでお伽話の妖精のようだ。

しかし、当の本人たちは自分たちが周りの興味を引いてるなどまったく気づかずひよこひよこならんで歩いていつてしまった。

かなり広い庭園を抜け、ようやく校舎の入口が見えてきた。プシーはこんなに広い庭園を見たことがなかったので隅々まで見てまわりたい気もしたが、入口にたつ鋭い目つきの試験官と思しき初老の女性が目に入り渋々諦めた。

しかし今からなにが始まるのだろうか。見たところ、あの問題を解けたかは置いといて、およそ百人程度の間人がここに集まっていた。そのどれもがプシーと同じかそれよりも少し年上の若者だ。割合でいえば男が大分多い。

男尊女卑的な思考がこの時代にはあるのだろうか。とプシーは顔をしかめる。

そうしてしばらく経つと、試験官らしき女性が口を開いた。思ったよりも低く落ち着いた声だったが、不思議と耳に入る。気づけば先程まで騒がしかった周りの喧騒も静まりかえっていた。

「ようこそみなさん、お待ちしておりました。あの門をくぐったということは、それだけの決意を持っているということ。私たちはそんなあなたたちを心から尊敬しそして歓迎します。入学おめでとう、あの門をくぐった時点ですであなたたちは合格です」

女性が言い終わると同時に、一斉に周りから歓声があがる。なんだ暑苦しい、と隣を見れば目をキラキラさせた我が妹ミューがいた。

「兄貴、今のあの人、なんだかなんだったかっこよくね？」

「おう、そうか」

思わずなんだかを×2してしまうほどミューには魅力的に映ったらしい、あの女性は。まあ確かにおばちゃんて感じではなくミセスって感じだったな。とプシーは本人にしか深い意味は解らないことを考えながら今後のことに思いを馳せる。

すなわち。

「なにするところなんだろ」

いまだ二人は、この学園の存在する主旨を理解していなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677y/>

ツアラトウストラの塔

2011年11月27日22時50分発行